



Title	中国ツングース系民族の民間伝承と日本の民間伝承の比較研究：スサノオノ命と共工について
Author(s)	白, 秀石
Citation	大阪大学言語文化学. 1995, 4, p. 3-14
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/78131
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

中国ツングース系民族の民間伝承と 日本の民間伝承の比較研究

——スサノオノ命と共工について——*

白 秀石**

関于『古事記』、『日本書紀』に記載の日本神話、日本の学者大都認爲其受中国南方的少數民族苗・瑶・僮の影響頗深，並認爲這些神話是從中國的南方傳到日本來的。本文對素盞鳴尊的性格與共工的性格進行了分析與比較，素盞鳴尊與共工在暴風雨神的性格、天神性格、地方神的性格以及他們都被流放到地下黑暗的冥府世界等方面是相似的，這表現了北方薩滿教的天界、地上（界）、下界的世界觀。本文還比較了被素盞鳴尊所殺的八岐大蛇與共工之臣相柳之間的相同之處，從而能間接地爲素盞鳴尊與共工之間有關聯提出佐證。本文論證了共工與夙沙、禰慎、商同出一族，都屬於通古斯系，而且素盞鳴尊在高天原觸犯天照大神，被諸神處以湯湯雨中的剪髮割爪的贖罪形體式是相一致的。也就是說，中国東北民族通古斯系的剪髮割爪的贖罪形式這一古老風俗也存在于素盞鳴尊的神話中，因此我認爲素盞鳴尊神話與通古斯系的共工神話之間有聯繫，並認爲共工神話是從遼東半島傳入朝鮮，又經朝鮮傳到日本來的。

1 『古事記』、『日本書紀』に語られた日本神話については、中国の南方民族の苗・瑶・僮の影響を受けて、南の方から日本に流伝してきたとする説が強いようである。スサノオノ命の話及び八岐大蛇の話の流伝についても南方系説が強い。勿論私は南方系説を完全に否定するものではないが、スサノオノ命の性格と東北のツングース系の共工の性格、及び八岐大蛇の話と共工の臣相柳の話と比較して、これらの話はツングース系の神話と関連があって、中国の東部から朝鮮に伝えられ、そこから日本に伝わってきたのではないだろうかと論述したい。

2 『古事記』によれば、黄泉の国から帰ってきたイザナギ大神が禊ぎをしたとき、アマテラス、ツクヨミ、スサノオの三貴子が生まれ、この三人それぞれに分担領域が割り当てられた。スサノオノ命は父神に海原統治を委任されても治めず、根の堅国国へ行きたいと泣きわめいて、怒る父神に追放を命じられた。しかしス

* 中国的通古斯系民族的民間傳承与日本的民間傳承之比較研究——关于素盞鳴尊与共工——

(白 秀石)

** 言語文化研究科博士後期課程

サノオノ命は根の国へ行く前に、姉のアマテラス大神に別れをするために高天原に昇ったが、アマテラス大神に自分の国を奪いにきたと疑われた。そこで自分に邪心の無いことを証明するため、アマテラス大神と宇気比をした。スサノオノ命は自分の潔白が証明されるとさんざんに乱暴な行ないを始め、ついにアマテラス大神が天の岩屋に隠れたという粗筋であった。『日本書紀』にもさまざまな異伝がのっているが、大筋は『古事記』とほぼ同じである。

記、紀の高天原神話ではスサノオノ命は天上の秩序の反抗者、破壊者として書かれている。その荒々しい性質はかれの本来的な内面から来たといわれている。スサノオノ命の名前はタケハヤスサノオ、タケスサノオ、ハヤスサノオなどがあり、その「タケ」や「ハヤ」は「勇武」を表し、「スサノオ」は「荒れすさぶ男」の意味である。スサノオノ命は命じられた海原を治めることもせずに泣きわめき、「八拳ひげ、心前に至るまで」泣きつづけ「青山は枯山如す泣き枯らし、河海は悉に泣き乾き」(記)「国の内の人民を多に夭折しめ」(紀)というような猛烈なものであった。これを自然神話的に解釈すると、スサノオノ命は暴風雨神であるとされるのである。¹⁾ スサノオノ命が高天原に昇る時「山川悉に動み国土皆震き」(記)という驚天動地の暴風雨神のような荒さが描かれている。スサノオノ命は高天原でアマテラス大神と宇気比をした。かれは勝ちほこって種々の乱暴をはたらき、アマテラス大神の作る田の畔を離ち、溝を埋め、その御殿を不浄物で汚すなどの悪行をした。また忌服屋の頂から逆剥ぎにして天の斑馬を投げ込んで、機織り女を死なせた。それでアマテラス大神が「見畏みて天の石屋戸を開きてさしこもりましき」すると「高天原皆暗く、葦原中国悉に闇し、これによりて常夜往きき」(記)ということである。畔離、溝埋などは暴風雨による災害だと思われる。天日が隠れ、天地晦冥となって、天上と地上の秩序を混乱させるのも天上を犯す暴風雨神の作為であると言えよう。ここでスサノオノ命の暴風雨神的性格は明らかである。

しかし、スサノオノ命は天神の性格も持っている。沼沢喜市氏が論じたようにスサノオノ命の父イザナギは天父である。つまりイザナギが「世界の始め、国を被うていた朝きを吹き払ったときの息は、風であり、妻を失って悲しみ泣いたときの涙は、雨であり、妻の死因となった火の神を、怒って斬ったときの彼の剣は、雷であった。彼がヨミの国から帰ってきてきて川にいり、禊ぎをし、両の目を洗っ

¹⁾ 松前健『出雲神話』p. 77 講談社現代新書 1976年

たときに、日の神と月の神が生まれ、鼻を洗ったときに、暴風の神が生まれた。イザナミと別れてのち、彼は天にのぼり、そこに永住することになる。こういう性格の神は自ら天神であるか、ないしは天に関連をもつ神である」という。このようにイザナギは天父の性格を持つ。²⁾ スサノオノ命は天父イザナギの息子であり、しかも天上界高天原の主宰者アマテラス大神の弟であるため、天神の性格も持っている。

スサノオノ命は天神の性格がありながら、国つ神の性格もある。『古事記』では、出雲系の国つ神の代表者である大国主神（大穴牟遲神）はスサノオノ命の六世の孫とされているが、『日本書紀』本文ではスサノオノ命の子と記し、書紀の一書では六世の孫とも七世の孫とも書かれている。つまり大国主神は、スサノオノ命を祖神とする出雲系の神格とされたのである。出雲地方ではスサノオは飯石郡須佐の一地方神であり、その名は「須佐の男神」を意味する。出雲には須佐社（神社）があり、スサノオは地方神として祀られる。紀伊にも須佐神社があり、そこでスサノオは海と船の神として祀られる。スサノオは海や海人に深い関係のある神である。このようにスサノオの国つ神の性格ははっきりしている。

『古事記』によるとスサノオノ命は父神に海原統治を委任されても従わず、怒る父に根の堅州国に放逐を命じられた。根の堅州国とは根の国、底の国とも呼ばれ、地下にある暗黒の死者の世界であるとされ、一般には黄泉の国と同じものとされている。

スサノオノ命の暴風雨神の性格、天つ神の性格、国つ神つまり地方神の性格、及び至高神に逆らって暗黒の国に放逐されたなどの諸点において、中国古代神話における共工の話がそれと類似して対応している。

3 共工もスサノオノ命と同じく暴風雨神の性格を持っている。『淮南子』³⁾に「舜之時、共工振滔洪水，以薄空桑，龍門未開，梁呂未發，江淮通流，四海溟滓，民皆上丘陵，赴樹木。（舜の時、共工、洪水を振滔して、以て空桑に薄る。竜門（峽）未だ開けず、梁呂（山）未だ発かず。江淮は流れを通じ、四海は溟滓たり、民は皆丘陵に上り、樹木に赴く。）とある。共工は、洪水をおこし、そのため四海は暗冥となって、人々は丘陵や樹木の上に避難したという話である。四海を暗冥に包むのは暴風雨の作為である。ほかに共工が暴風雨神である話がある。『淮

²⁾ 沼沢喜市「南方系文化としての神話」『国文学解釈と鑑賞』30（11）p. 15-20 1965年

³⁾ 『淮南子』本経訓漢劉安

南子』に「昔共工與顓頊爭爲帝，怒而觸不周之山，天柱折，地維絶，天傾西北，故日月星辰移焉，地不滿東南，故水潦塵埃歸焉。」とあるがこれは昔、共工は顓頊と帝位を争って戦ったが、共工の力が余って不周山に触れた。この山には天を支える柱と天地を繋ぐ維があったが、共工が触れたため天柱が折れ、地維も切断され、その結果、天は西北に向いて傾斜し、地は東南に傾き、日月星辰は西北に移動し、大雨が降り注いで濁流が渦き東南に流れるに至ったという意味である。天柱を折り、地維を切断するというのは、共工が暴風雨神としての巨大な破壊的エネルギーを有する荒ぶる神であったことを語っている。共工の天柱を折り、地維を切断するのとスサノオノ命の高天原での神田の畔離、溝埋などの悪行は同じく暴風雨による災害である点においては一致している。また洪水を起こし四海が暗冥となり、天地が傾斜し、日月星辰が移動するのは、天日が隠れ、天地晦冥となるのとは対応している。

共工もスサノオノ命と同じく天神の性格を有する。『淮南子』墜形訓の高誘の注には「共工天神也、人面蛇身」とあり、共工は天神であることを語っている。また『山海経』⁴⁾に「炎帝之妻，赤水之子聽訖生炎居，炎居生節並，節並生戲器，戲器生祝融，祝融降處於江水，生共工。」とある。炎帝とは五方の天帝の一人で、すなわち東、南、西、北、中五方の天帝の中の南方の天帝のことである。祝融は楊子江に天降り、共工が生まれたという。共工は天帝（天神）の五世の孫で、天神の性格がある。

さらに共工もスサノオノ命と同じように国つ神の性格を有する。共工氏族はもと水をとてムとして崇拝する氏族である。『左傳』⁵⁾に「共工氏以水紀，故爲水師而水名。」とあり、共工という氏族は水をとてムとし、水神にして、水を氏族の名にした。『淮南子』に「共工、水官名也」とある。共工の姿から見れば

- a. 共工人面蛇身朱髮也。⁶⁾
- b. 西北荒有人焉，人面朱髮，蛇身人手足，而食五穀，禽獸愚頑，名曰共工。⁷⁾

（西北荒に人があり、人の顔、赤い髪、蛇の身、人の手足であり、穀物をたべ、禽獣のように愚かでかたくなで、名は共工という。）

- c. 共工天神也，人面蛇身。

⁴ 『山海経』海内経

⁵ 『左傳』昭公十七年

⁶ 『山海経』

⁷ 『神異経』西北荒経

という蛇の要素が含まれているのは明らかである。凡そ蛇は農耕文化圏において、川や淵の水霊として信仰されており、共工が蛇形の水神として崇拜されていたと考えられる。すなわち、水をトーテムとして信仰する共工氏が共工を水神に変えたということである。水を支配する神としての共工の記録は数多く残されている。

共工之王，水處十之七，陸處十之三。⁸⁾

（共工の統治する地域は水のところが十分の七で、陸地は十分の三である。）

帝堯十九年命共工治河。⁹⁾

（帝堯十九年に堯帝は共工に黄河を治理するのを命じた。）

共工理水。¹⁰⁾

（共工は水を治理する。）

（昔共工）欲壅防百川，墮高堙庳。¹¹⁾

（昔、共工は、堤防を築いて、百川の（氾濫）を防ぎ、山を削り、低地を（その土）で埋めた。）

共工振滔洪水，以薄空桑……

共工爲水害，故顓頊誅之。¹²⁾

（共工は水害を起こしたので、顓頊が殺した。）

以上是水神としての共工の善と悪の二面を記した例であった。黄河の氾濫を治めたり、洪水を起こしたりする水神としての共工と航海や海人の保護神としてのスサノオとは対応している。

共工はまた社神、地方神として伝えられている。

⁸ 『管子』揆度

⁹ 『竹書紀年』

¹⁰ 『後漢書』張衡傳春秋識

¹¹ 『国語』周語下

¹² 『淮南子』兵略訓

共工氏，羲氏之代侯者也。¹³⁾

(共工氏は伏羲氏の時代の諸侯である。)

共工氏有子曰句龍，爲後土。¹⁴⁾

(共工氏は息子が有り句龍という名で、土地の主神である。)

共工氏之霸有九也，其子曰後土，能平九土，故祀以爲社。¹⁵⁾

(共工氏、天下を覇し、その息子は後土という名で、九州の全てを平定したため(共工)を社神として祀る。)

共工とスサノオは社に祀られる地方神であるのは一致している。共工は洪水を起こしたため、スサノオノ命と同じように追放された。

禹有功，抑下鴻，辟除民害逐共工。¹⁶⁾

(禹は功績があり、洪水を治め、民害を排除し、共工を放逐した。)

流共工于幽州，放驩兜于崇山，竄三苗於三危，殛鯀於羽山，四罪而天下咸服。¹⁷⁾

(共工を幽州に流放し、驩兜を崇山に放逐し、三苗を三危に駆逐し、鯀を羽山で殺し、四凶が罪せられて天下はみな感服した。)

舜流共工于幽州。¹⁸⁾

共工は水害を起こして、幽州に追放された。幽州とは幽都ともいわれる死者の世界、地下冥府のことを指す。そこには日照の到達しない暗黒幽冥の所である。暗黒の世界であったため、すべてのものは黒色で、玄民、玄鳥、玄蛇、玄豹など、玄は黒を意味している。『淮南子』に「古之幽都在雁門之北」とあり、暗黒の幽都が雁門の北にある。共工の追放地幽州とスサノオノ命の追放地根の堅州国とは

¹³⁾『路史』後紀二

¹⁴⁾『左傳』昭公二十九年

¹⁵⁾『国語』魯語上

¹⁶⁾『荀子』成相

¹⁷⁾『尚書』堯典

¹⁸⁾『孟子』万章上篇

同じく地下の暗黒の死者の世界のことで、すなわち、下界のことである。まとめるとスサノオノ命と共工は暴風雨神の性格、天神の性格、国つ神の性格、及び地下の暗黒の国に追放されたなどの点において一致している。これは天界——地上——下界の北方シャーマニズムの世界観を表している。

4 高天原を追われたスサノオノ命は出雲国の肥河の上流の鳥髪という所に天降りになった。そこでのスサノオノ命の八岐大蛇退治の話は『記』、『紀』によって書かれている。八岐大蛇退治神話を要約すれば、次のようになる。スサノオノ命が出雲の肥の川に天降った。その川の上流のほとりに老人夫婦が少女を間において泣いていた。事情を尋ねると、老夫婦にはもともと八人の娘がいたが、高志の八岐大蛇という頭が八つ、尾が八つの大蛇のために毎年一人ずつ食べられ、今年は最後の娘の番であるという。スサノオノ命は身分を明し、その娘を妻にし、代わりに大蛇を退治しようと申し出た。老夫婦は喜んで同意した。スサノオノ命の命じた通りに老夫婦は酒を作り、それを八つの酒槽に盛って大蛇を待った。やがて大蛇はやってきて、八つの頭で酒を飲んで酔ってしまった。スサノオノ命は剣で大蛇を切り殺し、肥の川は血に変じて流れた。大蛇の尾から霊剣が見つかった。そこでスサノオノ命はこれをアマテラス大神に献上したという話である。

ところで八岐大蛇退治神話の八岐大蛇は、斐伊川の水神として信仰された蛇神であると次田真幸氏が指摘していた。¹⁹⁾ 娘を大蛇に捧げるのは年ごとに肥の川が氾濫し、流域の田畑が壊滅することの恐怖からである。

八岐大蛇退治の神話はアンドロメダ型の説話として有名である。アンドロメダ型の説話はユーラシア大陸に広く分布する。東アジア東南アジアでは、ギリヤーク、アイヌ、朝鮮、蒙古、中国、インドシナ、ボルネオ、フィリピンなどに分布する。大林太良氏はこれは紀元前一千年紀前半の西から東への大きな文化の流れによって東アジアと東南アジアに伝えられ、日本へは恐らく、ややおくれて中国江南から伝えられたものであると推断している。²⁰⁾ 鉄井慶紀氏は中国におけるアンドロメダ型神話として『搜神記』と浙江省のチェンによる蛇退治の話を分析し、

¹⁹⁾ 次田真幸「日本神話にあらわれた雷神と蛇神」『日本神話』日本文学研究資料叢書 1970年

²⁰⁾ 大林太良『日本神話の起源』p. 159-165 角川書店 1973年

妖怪の蛇は多頭の怪蛇ではなく、また洪水という基本的要素も欠けているため、アンドロメダ型神話は中国に伝わると、洪水と怪蛇退治の結びつきを喪失することになったと指摘した。同氏はまた洪水を起こす多頭の怪蛇を退治する中国上古神話を例に上げ、八岐大蛇退治神話のモチーフはアンドロメダ型神話の人身御供のモチーフと中国の多頭怪蛇退治モチーフが複合したものであると推定した。²¹ この中国の多頭怪蛇の話と八岐大蛇の話は確かに類似点が多いので鉄井氏の説には賛同できる。しかし多頭怪蛇（共工臣相柳）の話は北方系の話（後述する）であるため、大林氏の中国江南から日本への流伝説には従いがたい。

中国の多頭怪蛇について『山海経』には次のように書いてある。

共工之臣曰相柳氏，九首，以食于九山，相柳之所抵厥為澤谿，禹殺相柳，其血腥，不可以樹五種穀。

共工之臣名相繇，九首蛇身，自環，食于九土，其所歆所尼，即為源澤，不幸乃苦，百獸莫不能處，禹湮洪水殺相繇柳，其血腥臭不可生穀，其地多水不可居地也。

（共工には相柳（繇）という家来がいた。九つの頭で、九山で食べていた。相柳のやってきたところは谷川になった。禹は相柳を殺したが、その血はとても腥さく、その地には五穀を植えることができなかった。）

八岐大蛇と相柳を比較すると、両者には次のような類似点がある。

- a. 共に多首（一は八首、一は九首）の怪蛇であること。
- b. 共に暴戾貪慾であること（菅の郭璞の注によると、相柳が「九首以食于九山」とは、「各首自食一山之物、貪暴難饜」という）
- c. 八岐大蛇の「腹を見れば、悉くいつも血爛れたり」とあるのに対して、相柳もその血腥くして穀を植え難かったとあること。
- d. 八岐大蛇と相柳はともに退治されたこと

八岐大蛇と相柳のこのような類似からも、八岐大蛇を殺したスサノオノ命は臣相柳を殺された共工との間に何か関連があると思われる。

スサノオノ命は高天原から追放される前に鬚と手足の爪とを切り祓える刑を科されたという話がある。スサノオノ命が高天原で罪を犯して、罪をあがなうため

²¹ 鉄井慶紀『中国神話の文化人類学的研究』「記、紀神話研究」p. 684-686 平河出版社 1991年

に鬚と手足の爪とを切られた話は、商の時代（殷の時代ともいう）の成湯が雨を祈る話と対応している。

昔者湯克夏而正天下，天大旱五年不收，湯以身禱雨於桑林，曰余一人有罪及萬夫，萬夫有罪在余一人，無以一人之不敏，使上帝鬼神傷民之命，於是剪其髮，斷其手，以身爲犠牲，用祈福於上帝，民之甚說，雨乃大至。²²⁾

湯時，大旱七年，卜，用人祀天，湯曰「我本ト祭爲民，豈乎自當之」乃使人積薪，剪髮及爪，自潔，居柴上，將自焚以祭天，火將燃，即降大雨。²³⁾

（昔湯は夏を滅ぼし、天下を統治した。その時干魃で五年も収穫ができなかったため、湯は身を犠牲として桑林で雨を祈った。湯曰く「私一人に罪があれば、万夫に及ばないが、万夫に罪があれば私一人に責任がある。一人の無能のため、上帝鬼神に民の命を奪わせるわけにはいかない。」それで髪を切り、手の爪を切り、身を犠牲にし、上帝の福を祈ったところ、民は大喜び、大雨が降ってきた。）

連年の干魃で、民の命である穀物が不熟となったため、湯（王）は咎めを引き、みずから身の一部分である髪や手足の爪を切って、身を犠牲にして贖罪したのである。これと対応してスサノオノ命は自分が罪を犯したのであるが、罰として鬚と手足の爪を切られることにより贖罪したのである。贖罪の形が同じである。言い換えれば、身体の一部を犠牲にするという贖罪の形は中国ツングース系の古い風習であったが、このツングース系の古い風習はスサノオノ命の神話の中にも見られるのである。

5 昔、中国には夙沙という国があって、今の山東省にあった。夙沙について『帝王世紀』には「諸侯夙沙氏，叛不要命，箕文諫而殺之，炎帝退而修德，夙沙之民，自攻其君而歸炎帝（諸侯夙沙氏、叛いて帝命を聞かず、箕文、直諫して殺される。炎帝、退いて徳を修める。夙沙の民が自ら君を攻めて炎帝に帰順する。）」とあり、『淮南子』には「宿沙之民，皆自攻其君而歸神農」とある。

炎帝は神農のことである。夙沙の民が自ら王を殺し、炎帝に帰順したことは宿沙の民が自ら君を殺し神農に帰順したのと内容が全く同じである。また夙沙と宿

²²⁾『呂氏春秋』順民篇

²³⁾『文選』思玄賦李善引注『今本無』

沙の発音も同じであるから、夙沙と宿沙は同一の国であるとは断定できる。『淮南子』道應訓の高誘の注に「伏羲神農之間、有共工宿沙霸天下者也（伏羲神農の間に、共工宿沙があり、天下に覇となった）」とあり、宿沙は共工のことであることははっきり書かれていた。『漢書』律曆志下に「共工氏は九域に伯たり」というのは共工氏は天下を支配していたと言う意味である。『英賢傳』には「夙沙炎帝時候国、始煮海爲鹽、爲炎帝所滅、其地在山東膠東道境（夙沙は炎帝の時の侯国で、始めは海水を煮て、塩を作り、炎帝にほろぼされ、その地は山東省膠東道である。）」とあり、共工の活動領域は黄河、淮水の中下流で、夙沙の所在地とはほぼ一致していた。

山東省の夙沙と東北地方の肅慎とツングースの関係について凌純聲は『松花江下游的赫哲族』に陳子怡の説を引用している。²⁴「東北民族は肅慎が一番有名である。山東には神農の時夙沙氏がおり、黄帝の時も夙沙氏がおり、皆中原に征服された。発音から見れば、同族だが二つに訳されている。山東に入ったものは東夷といい、内地に同化した。東北に残ったものは原状を永く保っていた。肅慎族は弓石を作るのが有名で、夷という文字は人が弓を負っている形をとる。封父の繁弱という弓は国家の宝物であり、これは技術的には一つの系統で伝わってきたのが証明できる。古代の刀幣の流行地域は今の出土したものから見て奉天から海に沿って南へいき山東で止って、境ははっきりしている。内地ではそうでない。このことは国宝からみれば同一系であることがわかる。沙鍋屯ではかつて人を殺して妖神を祭る証拠が見つかった。東夷にもこの風俗があった。だから宋襄公は次睢の社で鄧子を犠牲にしたのである。これは礼俗からみて同系の証拠である。夙沙は肅慎と同じだけでなく、成湯の商も沙の転じた音ではないだろうか。なぜなら成湯は確かに東北民族の出身だから、成湯が有莘を娶るのは漢滿通婚の初めである。商の礼俗には、人を殺し神を祭るという事実があり、成湯は雨を乞うため、自ずからを犠牲にし、宋襄公は鄧子を犠牲にするなどほかに、最近葉玉森は甲骨文の中から、たくさんの人を殺して祭る証拠を見つけた。これは沙鍋屯の遺風である。紂が亡ぶと、東方の淮夷が数十年暴れて従わず、淮夷が亡ぶと、周人はやっと平安になった。紂を討伐することで、孤竹の伯夷、叔齊は命をかけて反対した。

箕子は朝鮮に行って、原地人は彼を王にした。この種族の境は明らかで、東は

²⁴ 凌純聲は『松花江下游的赫哲族』p. 31、32 に陳子怡の『中華民族的女系時代』を引く

淮海から、北は朝鮮までである。殷とは血縁関係がなければこんなに関係の強いはずはない。それで殷は東方民族であると断定できる。この東方の男系民族が内地へ遷移して漢民族と融合したのは明らかである。それには文化の面でも証拠がある。周髀の天文学は北極付近に行ったことがなければこんな立派な見解があるはずはない。地理的には東北民族だけがベーリング海峡を往き来するのが可能である。海外九州の説もこの民族でないとこんな思想を持っているはずはない。これも東北民族が中原に遷移する証拠である。」凌氏は陳氏の説を要約してこういう。要するに肅慎、東夷及び商民族は同一の源流からでたものである。東北民族は東北から中原に遷移し、成湯が有莘を娶るのを漢滿通婚の初めとする。言い換えれば、成湯の子孫は満州族から出たものである。ここから推測すれば、商、東夷、肅慎はみな今日のツングース族に属していると考えられるのである。

以上をまとめると、夙沙、宿沙、肅慎は同族の違う訳名ということがわかる。また宿沙は共工のことで、共工も肅慎と夙沙とは同族である。すなわち共工はツングース系のことである。先に述べたようにスサノオノ命の暴風雨の性格、天つ神の性格、国つ神の性格はツングース系の共工のと類似していること、八岐大蛇は共工の臣相柳と似ていること、またスサノオノ命の贖罪の形に中国の東北民族の古い風習が存在していることなどの諸点によって、日本神話とツングース系の神話と何か係わりがあると私は推測する。

夏王朝の末（約紀元前十七世紀）黄河下流に商という夷人の国が強盛になってきて、夏を滅ぼした。商はまた東夷と呼ばれている。『呂氏春秋』には「商人服象，為虐于東夷。」とある。商はどんどん勢力を延ばして黄河中流まで占領した。商の活動領域は河南の北部を中心地としての河南、山東、河北、遼寧、山西、陝西などである。商の時よく戦乱が起きたため、人民の遷移も頻繁にあった。後に商は周に滅ぼされ、商の人々は周の奴隷となった。しかし周の統治に反抗し、周から東のほうへ逃げ出す人が多かったようである。商紂（商の最後の王）の臣箕子は東の朝鮮へ行って、朝鮮の王と成ったという話があった。こうしてツングース系の神話や文化などは箕子のような東へ行く人達によって遼東半島を経て、東に朝鮮まで伝わって行き、さらに朝鮮から日本まで伝わってきたのではないであろうかと私は考える。

参考文献

- 袁珂『上古神話選釋』 人民文学出版社 1979年
袁珂『神話故事新編』 中國青年出版社 1963年
凌城淮『松花江下游的赫哲族』 上海文藝出版社民俗民間文學影印資料之六十三
大林太良『日本神話の起源』 角川書店 1973年
大林太良『日本神話の構造』 弘文堂 1975年
大林太良『北方の民族と文化』 山川出版社 1991年
松前健『出雲神話』 講談社現代新書 1976年
吉野祐子『神神の誕生』 岩波書店 1990年
佐々木高明『日本文化の起源』 講談社 1993年
鉄井慶紀『中国神話の文化人類学的研究』 平河出版社 1991年
次田真幸『日本神話』 日本文学研究資料叢書 1970年